

会議の概要(議事録)

会議の名称	(番号) 1 - 2 5	令和5年度第3回墨田区産業振興会議		
開催日時	令和5年11月14日(火)午後3時から午後5時まで			
開催場所	墨田区産業共創施設 SUMIDA INNOVATION CORE「THE STAR」			
出席者	委員7人(関 満博、長崎 利幸、有菌 悦克、川路 さとみ、上條 久美、平尾 伸子、郡司 剛英産業観光部長) その他、デロイトトーマツコンサルティング株式会社宮内氏がオブザーバーとして、産業振興課長・産業振興課職員が、事務局として参加した。			
会議の公開 (傍聴)	公開(傍聴できる)	傍聴者数	1人	
議題	1 開会 2 出席者紹介 3 講話 4 議題 産業集積のアップデートに資するための「SUMIDA INNOVATION CORE」のハブとしての在り方について 4 意見交換 5 閉会			
配付資料	出席者名簿 席次表 資料 産業集積のアップデートに資するための「SUMIDA INNOVATION CORE」のハブとしての在り方について			
会議概要	1 開会 2 出席者紹介 出席者が自己紹介を行った。 3 講話 茨城県日立市等の事例から国内産業の現状について関座長が講話をした。 4 議題 事務局から資料を用いて、下記のとおり説明した。 (事務局) 今回はSUMIDA INNOVATION CORE(SIC)の活用方法を委員の皆様から議論いただきたい。まずこの施設の概要と背景について説明する。			

会議概要

- ・ 資料の1枚目にはハードウェアスタートアップ拠点構想について記載している。区内の3つのエリア(錦糸町エリア、八広・東墨田エリア、文花・立花エリア)の特徴を生かして区内産業集積のアップデートを目指す構想で、そのエリアの1つである錦糸町エリアは、様々な人の出入りにふさわしいまちで発信力があり、地域ネットワークを活用した「価値共創・交流・発信」拠点と位置付け、その象徴的な施設としてS I Cを整備した。
 - ・ 外から人を呼び込んで中の人と繋げることがS I Cの大きな目的であり、繋げる先は区内大学や区内ものづくり企業を想定している。
 - ・ 資料の2枚目はS I Cのハブとしてのイメージを図にしたものである。墨田区の地域性に注目した外部の人をこの施設を介して呼び込み、墨田区内の人に繋げることで社会課題等を絡めて新しい産業集積を作り上げていくという形になっている。
 - ・ 資料の3枚目は違う観点からこの施設の特徴を説明するものである。墨田区の産業集積を守るために区の施策・事業を直接区内企業に提供していた従来型の施策を、「守りの取組」と記載した。
 - ・ S I Cでは直接的ではなく、スタートアップやクリエイター等この施設を利用する方にまずサービスを提供し、成長過程または成長後に区内ものづくり企業と繋がることによって、新しい製品の開発など様々な波及効果を互いに享受していく形とし、減少し続ける工場を少しでも増やす「攻めの取組」と記載した。
 - ・ 資料4枚目はこの施設の目的である「人を繋げる」をイメージしやすいように観光案内所に例えたものである。観光案内所自体には様々な情報が集まっていて、そこに訪れる観光客の方々に適した情報を提供するという機能があるが、S I Cも特に墨田区のものづくりに関する情報・ノウハウ・技術が集積していて、S I Cに集まった人達の必要に応じて区内ものづくり企業に繋ぐ役割を持っている施設であることを示している。
 - ・ 資料5枚目は人を繋げることを具体的に説明する資料である。肝になるのは区内のものづくり企業とスタートアップをどのように繋げるかということである。有菌委員にも入っていただいている区内企業で構成されるディレクションチームにスタートアップの要望を聞いていただき、咀嚼した上でものづくり企業と繋げるという、いわばものづくりのプロの方々に繋ぎ役になって貰うということがS I Cの大きな特徴である。恐らく他のスタートアップ支援施設にはない特徴である。
 - ・ 以上を踏まえて、委員の皆様のお立場から、S I Cをこのように活用したい又はこのようなことがあれば使いやすい等のご意見をいただきたい。
- (長崎委員)
- ・ このほかにS I Cについて補足することはあるか。
- (郡司委員)
- ・ S I Cのキーワードは「産業集積のアップデート」である。墨田区はものづくりのまちとしての看板を下さないことを、これまでの産業振興会議で決めたが、産業集積は減り続けていて、年々ものづくりのまちと言いつらくなっているのが事実である。そのような中で、新しく従来型のものづくりを始める人が出てくることは考えにくいことから、産業集積を守るためには違う業態の方々に既存の産業集積を補完する必要がある。

会議概要

- ・ 以上のことから、S I Cをハブとして集まったスタートアップの方々と既存の区内ものづくり企業との融合を試みるのが、S I Cの設置目的である。我々としては産業集積のアップデートを図るためにスタートアップ支援という機能を使って、墨田区という街の産業を守っていきたいと思っている。そのため、S I Cは実験的であり、意欲的な施設である。
- ・ ハコは完成したので、あとはどのような魂をこの施設に入れるのか、そのようなことを本日議論いただきたい。

(長崎委員)

- ・ 本日の会議では、オブザーバーとして本施設の運営責任者であるデロイトトーマツコンサルティング株式会社の宮内氏に参加いただいている。施設開館から2週間経過した感想も含めてS I Cについて説明いただきたい。

(宮内氏)

- ・ 開館準備から今日に至るまでの感想や意見を述べさせていただく。デロイトトーマツグループとしてはこのようなスタートアップ支援施設の運営実績はいくつかあり、東京都でいうと「TOKYO UPGRADE SQUARE」「NEXs TOKYO」がある。これらの施設とS I Cの大きな違いは、S I Cの目的が「スタートアップ支援を通じた産業集積のアップデート」という点である。
- ・ 実際に施設を運営して2週間が経過しているが、他の施設との違いが大きく表れていることを実感している。他のスタートアップ支援施設では、オープン後は人がまばらに来ることから始まるが、S I Cは施設の目的に合った方々に来ていただいている。
- ・ S I Cの大きな目的であるものづくり企業とスタートアップの共創を生み出していく1つの形として、どのような製品・プロジェクトが作れるかという話し合いが既に行われている。墨田区の皆様と議論しながら目的を磨き上げ、スタートアップと区内企業が会話をするきっかけを作り、スタートアップに対してものづくり企業との共用プラン作成の支援をする等、施設としての機能が上手く働いた2週間であった。今年度の半年間で、このような共創事例を数多く増やしていきたいと思っている。
- ・ 渋谷区等のスタートアップ支援施設との違いを出すために、「墨田区ならではの」ということを強調しており、その中の1つのキーワードとして「ものづくり」がある。実際に、区内企業の方々が積極的に施設を利用しているように見える。先日、東京商工会議所の皆様が見学に来たり、S I Cを商談で利用している区内企業の方が、自らこの施設を案内したりすることも見受けられた。それはS I Cの立ち上げ段階からものづくり企業の方々と議論してきたことが、開設後の動きとして表れていると思っている。
- ・ 施設運営を受託しているデロイトトーマツグループとして、区内企業との共創を生み出せるスタートアップを積極的に呼び込み、単に繋ぐのではなく、スタートアップと区内企業とのビジネスを作り上げるようにするのが我々のミッションだと思っている。
- ・ 今後我々として作っていきたいのは呼び込んだスタートアップのインセンティブの部分。そのために、スタートアップに関わるステークホルダーの充実や、ものづくり

会議概要	<p>の価値をスタートアップに理解してもらうことに注力するつもりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ものづくりの集積地である墨田区で実施している意味合いが他のスタートアップ支援施設との大きな違いだと思っているので、我々デロイトトーマツグループも墨田区の中に入りこんで、この施設から産業集積のアップデートに繋がられるようにしていきたい。 <p>(長崎委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> 今の話を聞いていると、ものづくりがベースにあることが墨田区と他区の大きな違いである。区内企業の方々がS I Cを積極的に利用しているということは、従前から区との関係が構築されているためと感じているが、そこが他のインキュベーション施設との違いであるのか。 <p>(宮内氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> その通りである。東京都等の施設は地場の企業と一緒に施設を作っていくというプロセスをそもそも踏んでいない。S I Cは産業振興という政策目的に注力する施設であることが大きな特徴である。 <p>(長崎委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京商工会議所としてS I Cの説明会を実施して繋がりを作ったそうであるが、上條委員はそのあたりどう考えているか。 <p>(上條委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> 開設後の運営が順調であるという宮内氏の意見を聞いて安心している。東京商工会議所としてS I Cの説明会を実施した理由は、東京商工会議所の一般会員がS I Cの活用方法を知らない状態であったからである。 どのような人がS I Cを利用するのか東京商工会議所として見えてこない部分があった。説明会に来た方々の反応も思っていたより少なかった。もっと広く一般の方々に関心を持っていただかないといけないと感じている。 <p>(関座長)</p> <ul style="list-style-type: none"> この手のもので上手くいったのは京都のK R P (京都市リサーチパーク) が代表例である。成功した理由は「京都市ベンチャー企業目利き委員会」が京都に集まったベンチャー企業を評価して、特に優れた事業プランを持つ企業には認証し、支援をしたからである。東日本では成功したケースがあまりない。仕組みではものは動かない。人に出資することが大事。 <p>(郡司委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> 運営という部分ではデロイトトーマツグループに委託をしているが、メンバーとして全国的にも力のある株式会社浜野製作所に積極的に関わろうお願いしている。 <p>(長崎委員)</p> <p>S I Cは作業スペースとして使えるが、本当の使い方は新たなビジネスを始めるきっかけを作る場であり、スタートアップだけでなく区内企業も来ていただく場であると認識した。</p> <p>(郡司委員)</p> <p>S I Cは入居型の施設ではないため、施設に来る人達それぞれが融合したり、化学反応を起こしたりすることを次々に進めていきたい。</p> <p>(長崎委員)</p>
------	--

会議概要	<p>会員は現在で何社程度いるのか。</p> <p>(宮内氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 会員は合計 80 社程度であり、内訳としてはスタートアップが 30 社程度、区内企業が 10 社程度、メンターパートナーが 40 社程度いる。 <p>(関座長)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ メンターパートナーは具体的にどのようなことをするのか。 <p>(宮内氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まず 1 つ目はファイナンス、投資である。2 つ目として、大企業等の会員と新たな事業を興すイノベーション。3 つ目は専門的な方々が知財等の部分で支援すること。大きくはその 3 つが中心となっているが、その他にも先輩起業家・メディア・大学もあり、新しい共創を生み出すために各社が持っているリソースを提供していただくのがメンターパートナーである。 <p>(長崎委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 区内企業の会員は 10 社とのことであるが、もっと増やしていくつもりであるのか。 <p>(宮内氏)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ そのつもりである。墨田区から説明もあったが、S I C は「攻めの取組」であり、区内企業への投資の意味があるため、この施設の目的に共感してご理解いただいた企業に会員として入って貰っている。そのため、いきなり区内企業全社にアプローチをかけるのではなく、1社1社丁寧に誘っている段階である。 <p>(郡司委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 会員になることについて様子見の企業も多くいると思う。そのため、成功事例を次々に出して事例を見せていく必要がある。 <p>(有菌委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ベンチャーやクリエイターとの協業を、ゼロから作り上げていくことを全社がやる必要があるのか。時間や打合せコストが発生し、1つの案件の売上げが低い、付加価値が高いというベンチャーの仕事を、あえてやる必要のない企業も多くいるはずである。もしくは職人が社長である会社は、打合せのたびに工場が数時間止まってしまうため、事実上協業は難しい。そのため、S I C に関わる意味合いがある会社とそうでない会社が分かれる。 ・ 新ものづくり創出拠点と S I C がどのように関わっていくか、この会議で聞きたい。役割として重複したことをやってしまうのであれば、S I C が競合相手になる。ものづくりの現場をもたない新ものづくり創出拠点があっても価値がない。この施設を区内の誰に繋げるのかとなったときに、新ものづくり創出拠点はどうか関わっていくのか考えていかなければならない。 <p>(郡司委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新ものづくり創出拠点と競合という形にはならないと思っている。どちらかという相互補完である。 <p>(有菌委員)</p> <p>S I C がどのようにして区内企業に関わっていくのかを示している図に、新ものづくり創出拠点が入っていない。墨田区の事業の 1 つとして S I C を位置づけるのではなく、先ほど事務局から説明のあった観光案内所に例えたような、S I C に来れ</p>
------	--

<p>会議概要</p>	<p>ばスタートアップにとって必要な墨田区の産業情報の全てがある形にする必要があると思う。そうすれば新ものづくり創出拠点もその情報の1つになる。</p> <p>(郡司委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新ものづくり創出拠点は深堀ができる場で、S I Cはハブ機能としての場であるため、S I Cで深いコトをやる話になれば、個別の企業や新ものづくり創出拠点施設に繋がれば良いと思うので競合相手にはならない。 <p>(有園委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ S I Cと新ものづくり創出拠点を掛け算として示す必要がある。 ・ そのような意味では大きく2つあると思っている。まず1つが「誰と繋げていくか」。2つ目は「誰を呼んでくるか」。テック系ベンチャーがS I Cの主軸となっているが、繋がられる区内産業は金属とプラスチックだけである。繊維・印刷・皮革などを念頭に置くと、クリエイターもS I Cに呼ぶ必要がある。この2つの意味を整理することで区内の他の事業者とS I Cの関わり方が必然的に見えてくると思う。 ・ 墨田区として、新ものづくり創出拠点やその他の創業支援の象徴としてS I Cを開設して、全国のベンチャーに対して情報を発信していくことは凄く価値のあることだと思っている。それはco-lab 墨田亀沢だけではできないことである。 <p>(長崎委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 有園委員の「誰と繋げていくか」という意見に関して、区内企業との付き合い方を考える必要がある。また、上條委員の「まだS I Cを知らない区内企業が多い」という意見については、これをどう突破していくのか、そのアイデアを考えていく必要がある。 <p>(川路委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ S I Cについての資料を見て、実際に施設に来て、スモールビジネスである私たちはこの施設を使わないと感じた。ただ、イベントには行こうと思っている。 ・ では、私たちの役割は何かというと、この施設を通して生まれたモノを買う側であると思っている。完成品を使って広めていき、そこから生まれる新しい文化を広めることができると感じた。 <p>(郡司委員)</p> <p>「THE CORE」と「THE STAR」は機能が全く違う。「THE CORE」は基本的に様々な什器が設置されていて、主にスタートアップの支援やビジネスの場としての役割がある。「THE STAR」に関してはイベント・交流スペースとしての役割があるため、様々なモノや人が来ると想定している。例えば大人だけではなく、子供がくることも想定している。そのため、「THE STAR」の使い様はいくらでもあると思っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 川路委員の意見について、社会実装されて初めて世の中に出ていくプロトタイプを、社会実装過程で川路委員が使っていくようなS I Cとの関わり方もあると思っている。 <p>(長崎委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ある程度S I Cの使い方の想定はあるが、想定外の使い方が出てくる可能性もある。特に「THE STAR」のスペースに関しては使い方が比較的自由であるため、大きな効果を生む可能性を秘めていると感じている。
-------------	--

会議概要

(関座長)

- ・ 「ちよだプラットフォームスクエア」は良い例である。200社程度の入居機能を備えている施設であり、イベントを頻繁に実施して自由な使い方をしている。

(宮内氏)

- ・ 「THE CORE」の機能としてはスタートアップやクリエイターと新しいコトを興すということがメインになっている。スタートアップやクリエイターとの共創は想定していないが、SICを使って自社も含めたすみだのものづくりを広く発信していきたい人には「THE STAR」を使っていただき、墨田区の全ての中小企業にこの施設の利用者になってもらう可能性もあると委員の皆様の意見を聞いて実感した。

(郡司委員)

- ・ 職業体験やアントレプレナーシップに関するプログラムは沢山あるが、身近にスタートアップが働いている現場を実際に見られる機会はずっと無いので、教育の場としてもSICは魅力的である。「THE STAR」に様々な使い道があることは楽しみであると区の教育長は言っていた。
- ・ iU情報経営イノベーション専門職大学の4年生の進路として、全体の17%程度が起業である。これは一般的に非常に多く、その人たちの受け皿としてSICを活用するのは非常に良い流れができると思う。
- ・ 学内ベンチャーも今後生まれていくと想定している。その際のビジネススキル等をこの施設を通して身に付けてもらえればと思っている。iU情報経営イノベーション専門職大学として新たな教育プログラムになりうるし、墨田区としても区内発のスタートアップが生まれていくのは良い結果になるため、このような循環を生み出していきたい。

(平尾委員)

- ・ 観光案内所は、来ていただいた人に対して様々な観光地を紹介するといった主に利便性を提供することを行うが、積極的に観光案内所に集客し、どこかへ送客するという攻めの戦略を取っていない。紹介することによって区内を周遊していただくきっかけを創生できるが、成果は表しにくい。
- ・ 新ものづくり創出拠点は、来る人たちの目的が明確で、積極的に誘致しサポート等を行うことで直結して事業が発生するため、成功の指標を具体的に示すことが必要なのではないか。

(川路委員)

- ・ SICを運営するにあたっての目標数値があるのかどうか気になっていた。相談件数や成功件数などの指標があって、目標は月単位であるのか年単位であるのか。その数値によって、メンターやパートナー会員を増やしていくのか、または施設利用者を増やす取組をしていくのかが決まっていくと思う。

(宮内氏)

- ・ 目標数値はKPIやKGIとしての形で、スタートアップとものづくり企業の共創事例の件数を指標としている。その目標数値を作るために、スタートアップやメンターの会員数やスタートアップとのメンタリング件数を集計している。
- ・ デロイトトーマツグループとしてスタートアップを呼び込んでいるのは、ものづく

会議概要	<p>り企業と親和性の高いハード系スタートアップを中心に施設に誘引するためである。それは攻めの戦略であり、施設に誘引した数もK P Iになりうると思っている。</p> <p>(長崎委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> 要するに来館者のニーズが明確であれば要望に応えやすいが、多様で誰が何を言ってくるか分からず、どう応えていくのか不明確な状況であれば、要望に応えるのは難しい。ただそれをS I Cではやりたいということである。 <p>(郡司委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> S I Cにおいてはもっとわかりやすさが必要。だから産業集積をアップデートするために「墨田区はものづくりのまち」というものが1つのキーワードになる。ものづくりから入っていくが、ものづくりだけで全てを補完できるわけではない。 我々としては最初の部分でわかりやすいメッセージを発信していきたい。S I Cに来ることに対して価値を感じてほしい。施設利用者の全体数を増やさなければ可能性も増えない。そのため可能性を増やしていきたいと思っているが、そこが成功に繋がっていくかどうかは今後の運営にかかっているし、そこは試行錯誤であると思っている。 <p>(有蘭委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> 産業集積のアップデートとは墨田区の政策のキーワードである。スタートアップからしたら特別に墨田区に行く理由はない。他の自治体や施設の選択肢があることを前提として、スタートアップに対して墨田区にしかないモノを一言で表すとしたら何になるのか。 <p>(郡司委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> そこがまさに「ものづくりの熱いまち」「熱い人々とのつながり」になってくるのではないか。 <p>(有蘭委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> それであると、大田区にも熱い人が集まっているし、「墨田区に熱い人がたくさんいる」といったとしても、スタートアップやクリエイターが墨田区を選ぶ理由にならないと思う。 要するに、現在の議論は主語が常に墨田区の中だけであって、この議論は例えば他の自治体のインキュベーション施設にいるスタートアップの視点で考えなければならぬ。 <p>(平尾委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> 都会の観光案内所もこの話に通ずる部分がある。例えば他区の観光案内所の所在地があまり認知されていないように、都会に来た人は観光案内所に行くことを目的として来ていない。何か目的があって街に来たら、そこに観光案内所があったから立ち寄ったという人も多い。ただS I Cは都会の観光案内所の例とは違い、S I C自体に目的をもって来てもらう必要があるのではないか。 <p>(郡司部長)</p> <p>そこは墨田区としてご意見を伺いたい部分である。S I Cを選んでもらうために何が必要であるのか委員の皆様から意見をいただきたい。</p> <p>(有蘭委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> それを聞くのも一つの手であるが、発信する側で作る必要があるのではないか。こ
------	--

<p>会議概要</p>	<p>のような話をする際は、自分であれば一緒にポスターを作っていこうということなる。受け手側が感じたものをデザインしていくようなことが必要なのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 立ち上げの段階では、「想いと技術でつぎの未来を共創する場」というフレーズと部屋のデザインはあるが、この情報を見て、他区のシェアオフィスにいるスタートアップが「これは墨田らしいよね」とは感じないと思う。そこを作っていかなければならない。ものづくりというコンテンツをどのように外に発信していくかというフェーズに入っていく必要がある。 <p>(上條委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 私がS I Cに期待しているのは、東京商工会議所として実施できない、外部のスタートアップと地元の技術を繋ぐマッチングの部分である。 ・ 他区や地方からS I Cに来たいという方々を増やすために「ものづくり」を強く出す際、墨田区には約1900社の製造業があるということを見せれば非常に魅力的に見えるが、「実際に繋がれるのは10社(ものづくり企業チーム)です」という部分が現状弱いのではないか。 ・ 墨田区のホームページに「すみだ企業ガイド」というものがあるが、そこに各企業の出来ることや製品を掲載すれば、スタートアップとのマッチングの可能性がより上がっていくのではないか。それが出来れば墨田区ならではの具体的な魅力の一つになると思う。 ・ 「スタートアップ」という言葉だけが独り歩きすると、歴史の長い区内企業の方々が「自分に関係ない」と思ってしまわないかと感じている。 ・ ものづくり企業チームとして区内企業が10社しかいないと、かなりクローズドな印象に見える。これをいかにオープンに見せていくかが、誰でも施設を利用できるというイメージ作りとして大事である。今後のことを考えれば、なるべくオープンにするために企業数を増やす必要があるのではないか。 ・ 「スタートアップ」という言葉の定義に「新しいことを始める若い人」だけでなく、事業再構築補助金等を使って第二創業のような新しいことを始めている方々も含める必要があるのではないか。 <p>(郡司委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 我々として初期の情報発信方法が不十分であったと思っている。スタートアップという言葉は強調して発信してきたが、スタートアップの持つイメージが独り歩きしてしまい、既存の区内企業に「自分たちは関係ない」というイメージを持たしてしまった。それを払拭するために、我々は声を大にしてそのようなことはない発信しているが、少し遅かったと感じている。そのため、施設を運営する中で、そのイメージを払拭していくしかないと思う。 <p>(長崎委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第二創業をした事業者でも施設の会員になれるのか。 <p>(郡司委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 問題なく会員になれる。それこそアイデアベースの会議の中では「一度失敗した人でも歓迎する」といったイメージもあった。スタートアップは他の先進的な施設に行ってしまう、墨田区には来ないのではないかとも思っており、だとしたら一回失敗した人を墨田区が温かく受け入れようという考えもあった
-------------	--

会議概要

(有菌委員)

- ・ 第二創業を支援する機能はフロンティアすみだ塾等で代替できるものである。
- ・ 外に向けるメッセージと中に向けるメッセージを切り分けて考えなければならないと思っている。資料中の減らさない取組と増やす取組でいうと、墨田区は今まで既存の事業に対してどう支援するかということは日本一やってきたが、約9700もあった工場が1900程度まで減っているということからすると、外から企業を連れてくる支援もしていく必要があるということになる。
- ・ 既存企業の業種体験会のようなものをアクセラレーションプログラムの中に入れてみても面白いのではないか。

(宮内氏)

- ・ 第二創業を安定的なスモールビジネスとして行う方もいれば、スタートアップのような成長を急加速する方もいるので、第二創業全てを会員の対象とするかという議論は必要である。第二創業という大きな枠組みだけでなく、何をスタートアップというのかという定義をしつつ、区内企業が第二創業した際のS I Cの可能性ということは検討していけるのではないかと思っている。

(郡司委員)

S I Cがまだオープンして間もないこともあり、ブレないでやる必要がある部分と、臨機応変に対応していかなければならない部分がある。その時々最適解を見つけていく必要がある。今回の会議では委員の皆様の良い意見を貰えたと実感しているし、この意見を皆様の関わりの中で次々とフィードバックしてこの施設を盛り上げるために協力していただければありがたいと思う。

- ・ せっかく設けた施設であるため、上手く有効活用するしかない、要するに様々なステークホルダーに使い倒して欲しいと思っている。
- ・ 地域の金融機関である東京東信用金庫もS I Cに協力いただき、1週間に2回来ていただいている。地域全体でこのS I Cを支えるスタイルが出来上がればいい。

(上條委員)

- ・ 様々な職種がある中で、この施策としてもものづくりを全面に出しすぎているのではないか。結局作ったら売らなければいけないため、流通やサービス等も関われるきっかけも必要であると思っている。

(郡司委員)

- ・ 最初は墨田区ならではの特徴を出すために、キーワードとしてもものづくりを出した。そこをキャッチーにしなければ他の自治体と何が違うのかという話になってくる。

(長崎委員)

- ・ 区内企業とS I Cの関係の広げ方がこれからの大きな課題である。様子見どころか自分たちは関係ないと思っている企業をどう引き込むのか、そこが大事である。区外、場合によっては海外から来るスタートアップに対してどう墨田区を選んでもらうのか、1つはものづくりであるが、他の部分を考えていかなければならない。上條委員の意見である、「区内企業とのマッチング」に関しては一番の魅力にもなりうる。

(有菌委員)

- ・ 恐らく墨田区の魅力はものづくりではなく、プロトタイピングだと思う。そこに特

<p>会議概要</p>	<p>化しないとほかの自治体には勝てない。あとはクリエイティブに寄った仕事である。手書きの設計図でいいから製作することが可能であるような、どんな球を投げても返せるのが墨田区の強みである。</p> <p>(長崎委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 印象に残ったのは「産業集積のアップデート」はブレないということである。「ものづくりのまち」ということはしっかり示しつつも、S I Cの利用方法や人の関わり方は、場面ごとに柔軟に対応する必要がある。 ・ わかりやすい施設のメッセージを早めに発信する必要がある。それがS I CのPRになってくるし、人を集める手段になってくると思う。数を集めることにも繋がるので、おのずと成功事例も出てくるのではないかな。 ・ 施設だけでなく、結局は人であるという部分も重要であると思う。墨田区の強みの1つは他の自治体と比べて、地域の人ネットワークがかなり濃密なところである。 ・ 急にこの施設が出来たわけではないことが非常に重要である。恐らく、約10年前に新ものづくり創出拠点事業が始動したのをきっかけに墨田区の産業は大きく変化した。ベンチャーやクリエイターが墨田区に沢山来る契機となった。これまで力を入れていなかったのがスタートアップとの連携である。そこを埋めていけるのがこのS I Cなのではないか。
<p>会議概要</p>	<p>5 閉会</p> <p>郡司産業観光部長が閉会のあいさつを行った。</p>
<p>所管課</p>	<p>産業観光部産業振興課産業振興担当(内線:5440)</p>